

哀歌1-2章「神に愛された者の受ける傷」

1A 慰めを受けられないエルサレム 1

1B 苦役に服する女王 1-11

1C 寡の女 1-7

2C 汚れた女 8-11

2B 一体化する預言者 12-22

1C 神の怒り 12-17

2C 罪の告白 18-22

2A 敵のようになされた主 2

1B ご自分の足台 1-10

1C 要塞から神殿へ 1-6

2C 城壁 7-10

2B エルサレムの傷 11-22

1C 衰え果てる幼子と乳飲み子 11-16

2C 主に注ぎだす心 17-22

本文

哀歌1章を開いてください。私たちはエレミヤ書を読み終えましたが、哀歌は、その預言をしていたエレミヤがエルサレムの破壊を目撃して、そこに哀しみの声を歌にしたものです。葬式の時に歌われる嘆きの歌です。そして、ヘブル語の聖書では、哀歌は「ああ」という題名になっています。1章1節を見てください、「ああ」という嘆息の言葉から始まっていますね。このように、しばしばヘブル語の聖書は初めの言葉を書名にしています。この「ああ」という言葉が2章1節にも出てきて、各章の始めに出てきます。哀歌は5章ありますが、歌詞が五番までであると考えてよいでしょう。そしてちょうど、詩篇119篇のように各節がヘブル語のアルファベットの順番で始まっています。1節はアレフ、2節はベイト、そして3節はギメルという風に、です。歌詞を覚えやすくするためです。

この哀歌の中に、「嘆きの預言者」と呼ばれたエレミヤの涙が噴き出しています。その悲しみの感情を精一杯描いています。そしてそれは、エルサレムの人たちが犯した罪によるものでした。神に愛される者たちが罪を犯し続け、それで神によって懲らしめを受ける時の哀しみ、これが哀歌のテーマです。神に愛された者が罪のゆえに受ける傷が、どれだけ深いものなのかを知ります。

1A 慰めを受けられないエルサレム 1

1B 苦役に服する女王 1-11

1C 寡の女 1-7

1:1 ああ、人の群がっていたこの町は、ひとり寂しくすわっている。国々の中で大いなる者であっ

たのに、やもめのようになった。諸州のうちの女王は、苦役に服した。1:2 彼女は泣きながら夜を過ごし、涙は頬を伝っている。彼女の愛する者は、だれも慰めてくれない。その友もみな彼女を裏切り、彼女の敵となってしまった。

エルサレムが破壊されたことの哀しみを、初めから端的に述べています。それは、「寡になった」という哀しみです。かつて、ダビデやソロモンの時代の時には、数多くの国々がここに栄華があるとして、エルサレムを慕い、エルサレムに従っていました。それらのものが今は、全てを失っているという意味です。当時の「やもめ」というのは、「生きる術が無くなった」という乞食に近い状態にあります。エルサレムが生きるのに支えとしていたものが、今や取り外されてしまった、究極の孤独の状態を指しています。そして 2 節で、ゼデキヤの時代の時まで共にバビロンに対抗するために戦ってきた、アモン、エドム、モアブなどの国々が、エルサレムが包囲されると裏切り、助けに来ることはありませんでした。支えにしている友がみな、いなくなってしまったことを話しています。

1:3 ユダは悩みと多くの労役のうちに捕え移された。彼女は異邦の民の中に住み、いこうこともできない。苦しみのうちにあるときに、彼女に追い迫る者たちがみな、彼女に追いついた。1:4 シオンへの道は喪に服し、だれも例祭に行かない。その門はみな荒れ果て、その祭司たちはうめき、おとめたちは憂いに沈んでいる。シオンは苦しんでいる。

3 節で異邦人の中に住むことの苛酷さを述べています。神を神としてあがめていない環境というものが、いかに苦しいことであるか。普段はそのような環境に囲まれているから空気のようにしているけれども、神の民の中にいないことによって、自分がいかに守られ、安らかにされていたのかを知るのですが、その時は既に遅いのです。それから 4 節では、主への祭りをすることがなくなったことに対する嘆きです。そこで祭司たちが喜びの祭りを導き、また女たちも主への賛美に加わりませんが、どちらもうめいて、憂いに沈んでいるだけです。私たちに礼拝がなくなった時の究極の孤独をここに描いています。

1:5 彼女の仇がかしらとなり、彼女の敵が栄えている。彼女の多くのそむきの罪のために、主が彼女を悩ましたのだ。彼女の幼子たちも、仇によってとりことなって行った。1:6 シオンの娘からは、すべての輝きがなくなり、首長たちは、牧場のない鹿のようになって、追う者の前を力なく歩む。1:7 エルサレムは、悩みとさすらいの日にあたって、昔から持っていた自分のすべての宝を思い出す。その民が仇の手によって倒れ、だれも彼女を助ける者がいないとき、仇はその破滅を見てあざ笑う。

今や、仇であるバビロンが彼らの頭となっていて、栄えている状況であります。エレミヤははっきりと、なぜそうなったのかを行っています。「彼女の多くのそむきの罪のために、主が彼女を悩ましたのだ。」であります。罪のもたらした悩み、苦しみです。彼女が頼りにしていた首長たちは、いまや一般民と同じように捕囚の身となっています。そして、彼女は昔の宝を思い起こしています。そう

です、罪を犯した時に、自分が持っていた霊的な富を一気に失っていることを知るので。救いの喜び、愛、平安、そうした聖霊のもたらす実がなくなってしまう。戻って5節には、「幼子たちも、仇によってとりことなって行った。」と言っていますが、後でエレミヤは幼子たちにもたらされた悲惨を見て、嘆きの声を挙げます。

2C 汚れた女 8-11

1:8 エルサレムは罪に罪を重ねて、汚らわしいものとなった。彼女を尊んだ者たちもみな、その裸を見て、これを卑しめる。彼女もうめいてたじろいだ。1:9 彼女の汚れはすそにまでついている。彼女は自分の末路を思わなかった。それで、驚くほど落ちぶれて、だれも慰める者がいない。「主よ。私の悩みを顧みてください。敵は勝ち誇っています。」1:10 仇が彼女の宝としているものすべてに手を伸ばしました。異邦の民が、その聖所にはいったのを彼女は見ました。あなたの集団に加わってはならないと、あなたがかつて命じられたものが。1:11 彼女の民はみなうめき、食べ物を捜しています。気力を取り戻そうとして、自分の宝としているものを食物に代えています。「主よ。私が、卑しい女になり果てたのをよく見てください。」

午前礼拝でお話ししました。エルサレムを一人の女として喩えており、彼女が女王の座から一気に、見捨てられた売春婦にまで落ちぶれてしまいました。非常に不潔な姿でいるので、客さえが忌み嫌います。何をもって彼女が姦淫を犯したのか？と言いますと、それは主なる神によって、その恵みによって輝いていたのに、自分の美しさや栄えを奢って、主ではないところに欲望を使ってしまったからであります。私たちがいかに、主によって養われ、そこにある愛の関係から実が結ばれるのかということを考えないといけません。それは時間のかかる過程ではありますが、私たちがその霊的財産を自分の欲望のために使っていくのであれば、自分が慕っていた人や物から卑しめられることとなります。

そして、彼女が自分を生かすためにしていたことが生々しく描いています。「異邦の民が、その聖所にはいった」とあります。ユダヤ人のみが入ることのできる場所です。そして、集団に加わってはならないとモーセの律法の中で禁じられていた者たちが、そこに入っているのです。自分の最も大切にしている秘めた部分、すなわち主との親密な交わりの部分が世の汚れに犯されてしまった状況であります。これを、女性があまりにも飢えていて自分の体を知らない男に売っている姿に喩えています。「気力を取り戻そうとして」と新改訳は訳していますが、新共同訳は、「御覧ください、主よ／わたしのむさぼるさまを見てください。」と訳しています。これは、生き残りのために貪り食うという意味合いのある言葉です。ある種の醜悪さを示す言葉であります。

2B 一体化する預言者 12-22

そしてエレミヤの嘆きは、エレミヤらしいというか、主語を「私」になおすところまで行きます。自分自身は今、エルサレムの牢屋の洞窟の中において、その町の悲惨な姿を見ているのです。彼は、このバビロンによる破壊を客観視するのではなく、まるで自分自身に降りかかった災いのようにして、

エルサレムを「私」として語り始めます。彼の同胞の民に対する愛、また、エルサレムに対する愛が、彼をそこまでさせたのです。それは、まさにパウロが同胞の救いのためなら呪われた者となってよいとする、熾烈な愛です。「もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。(ローマ 9:3)」そして、イエス様ご自身が神であられるのに人となられたということは、つまり、ご自身を罪に満ちた人と一つになられることであり、神の怒りを受ける罪人となられるためでした。「詩篇 22:1 わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。遠く離れて私をお救いにならないのですか。私のうめきのことばにも。」

1C 神の怒り 12-17

1:12 道行くみなの人よ。よく見よ。主が燃える怒りの日に私を悩まし、私をひどいめに会わされた。このような痛みがほかにあるかどうかを。1:13 主は高い所から火を送り、私の骨の中にまで送り込まれた。私の足もとに網を張り、私をうしろにのけぞらせ、私を荒れずさんだ女、終日、病んでいる女とされた。

ここでエレミヤがエルサレムを自分と同一視して語っている姿は、まさにイエス様がエルサレムの町の外で十字架に付けられている時の苦しみと似ています。イエス様は、「道行くみなの人」に神の燃えるような怒りが置かれた十字架に付けられた身を晒しておられました。そして、「主が燃える怒りの日」とありますが、これが、私たちが罪を犯したことによって投げ入れられる火の池にもある神の御怒りです。「もし、あなたの手か足の一つがあなたをつまずかせるなら、それを切って捨てなさい。片手片足でいのちにはいるほうが、両手両足そろっていて永遠の火に投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。(マタイ 18:8)」そして、「足もとに網を張り、私をうしろにのけぞらせ」という言葉は、十字架の木に磔にされた辱めと似ています。さらに、「終日、病んでいる女」とありますが、一日中、イエス様は公衆の面前に晒されました。

1:14 私のそむきの罪のくびきは重く、主の御手で、私の首に結びつけられた。主は、私の力をくじき、私を、彼らの手にゆだね、もう立ち上がれないようにされた。1:15 主は、私のうちにいたつわものをみな追い払い、一つの群れを呼び集めて、私を攻め、私の若い男たちを滅ぼされた。主は、酒ぶねを踏むように、おとめユダの娘を踏みつぶされた。1:16 このことで、私は泣いている。私の目、この目から涙があふれる。私を元気づけて慰めてくれる者が、私から遠ざかったからだ。敵に打ち負かされて、私の子らは荒れずさんでいる。1:17 シオンが手を差し出しても、これを慰める者はない。主は仇に命じて、四方からヤコブを攻めさせた。エルサレムは彼らの間で、汚らわしいものとなった。

14 節ですが、ユダヤ人は首にくびきを付けられて、バビロンに捕え移されました。それをエレミヤは、「罪のくびき」と呼んでいます。罪は、言わば、私たちの首にくびきとなります。自分たちをがんじがらめにして、奴隷状態にします。そして 15 節ですが、頼りにしていた勇士たち、自分を守っ

てくれる人たちが倒れて、それで自分が踏みにじられたことを話しています。酒ぶねに踏まれるぶどうに喩えています、これは、黙示録でも神が怒りを示される時に描かれているものです(14:20)。自分の頼りにしていたものが、踏みにじられる姿であります。

そして、午前中学びましたが、慰めがないことに対する嘆きを言い表しています。娘として、女としてエルサレムを描いているのはそのためです。私たち人間は、「これがなければ生きられない」という支えになるものをもって生きています。そしてキリスト者もちろん、持っています。それを人が罪を犯す時に主は取り除かれることがあります。それによって、主が彼らを見捨てたのではなく、罪を悲しませること。そして、主の慈しみに触れることを目的にしておられます。ヤコブは手紙の中で言いました。「ヤコブ 4:9-10 あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいます。」

このような悲しみ、それから主に出会ったという証しは数多くあります。よく聞くのは、牧師が罪を犯した時です。まさか、こんな罪を牧師が犯していたとは？という衝撃が走ります。しかし、彼を涙をもって裁き、つまり、交わりの中から一定期間引き離し、そして彼が悔い改めと、神の赦しと癒し、また回復の過程の中に置き、それで残された教会が他の指導者の下で前進する、という証しがあります。牧師が悔い改めなければ、それほど悲しいことはありませんが、悔い改めたとしても、教会に傷は深く残ります。泣いて、泣いて、どうして自分たちは気づいてあげられなかったのか？と責めたり、そうやってどうしようもない、やり場のない悲しみを経て、そこの後に見える主の深い慈しみを味わうのです。これこそが、神の訓練による平安、成熟した者の味わうことのできる平安であります。

2C 罪の告白 18-22

1:18 主は正義を行なわれる。しかし、私は主の命令に逆らった。だが、すべての国々の民よ、聞け。私の痛みを見よ。私の若い女たちも、若い男たちも、とりことなってしまう。1:19 私は愛する者たちを呼んだのに、彼らは私を欺いた。私の祭司も長老たちも、町の中で息絶えた。気力を取り戻そうとして、自分の食物を捜していたときに。

エレミヤは、自分自身が罪のゆえに悩み苦しんだことを述べた後で、他の国々に対して語りかけています。渾身の思いを込めて、主の裁きは正しいことを証ししています。大胆な罪の告白です。罪の告白とは、このように神の裁きは正しいとすることです。自分が犯した罪に対して、赦してほしいとしながら、なおのことその裁きを受けたくありませんというのは、真実な悔い改めを経ていないことを意味します。性的暴行を働いた人が、示談の形で不起訴になることがあります、本当ならば牢獄に入れられなければいけないのです。

1:20 「主よ。ご覧ください。私は苦しみ、私のはらわたは煮え返り、私の心は私のうちで転倒して

います。私が逆らい続けたからです。外では剣が子を奪い、家の中は死のようです。1:21 彼らは私のため息を聞いても、だれも私を慰めてくれません。私の敵はみな、私のわざわいを聞いて、喜びました。あなたが、そうなさったからです。あなたが、かつて告げられた日を来させてください。そうすれば、彼らも私と同じようになるでしょう。1:22 彼らのすべての悪を、御前に出させ、あなたが、私のすべてのそむきの罪に対して、報い返されたように、彼らにも報い返してください。私のため息は大きく、私の心は痛みます。」

主に対して反抗したことが、いかに苦しみ悶えさせるものであるかを、エレミヤは表現しています。そして何度も、慰めてくれるものがないと嘆いていますね。これが3章の前半まで続き、そして、「主の慈しみ」の話題へと入ります。そして、これらのことを行なっている敵について、復讐を祈っています。復讐については、私たちはバビロンへの預言のところで学びました。彼らによる虐げは、神が自分たちを懲らしめているからです。けれども、その虐げそのものは悪であり、その悪に対して主が報いてくださるよう祈っているのです。これは、自分たちの手で報いることがないように、復讐することがないようにという願いであります。

2A 敵のようになられた主 2

1B ご自分の足台 1-10

そして2章です。2章は、さらに踏み込んだ歌となっています。それは、「主ご自身が、ご自身のものを傷つけた。」ということです。主がエルサレムを遠くから眺め、エルサレムを虐めたという類いのものでは決してありません。エルサレムは神に愛された都、神がご自分が住まわれると決められた都です。ですから、エルサレムを滅ぼすということは、自らを滅ぼす痛みを伴っているということです。このことも、父なる神がキリストを十字架に付けるようにさせる痛みに通じるものがあります。「神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。(2コリント5:18)」神が和解させてくださったのですが、キリストによって和解されました。キリストが十字架に付けられた時に、それは遠くから父なる神が御子を苦しめていたのではなく、まさに父なる神ご自身が自らを苦しめていたということでもあります。

1C 要塞から神殿へ 1-6

2:1 ああ、主はシオンの娘を御怒りで曇らせ、イスラエルの栄えを天から地に投げ落とし、御怒りの日に、ご自分の足台を思い出されなかった。2:2 主は、ヤコブのすべての住まいを、容赦なく滅ぼし、ユダの娘の要塞を、憤って打ちこわし、王国とその首長たちを、地に打ちつけて汚された。2:3 燃える怒りをもって、イスラエルのすべての角を折り、敵の前で、右の手を引き戻し、あたりを焼き尽くす燃える火で、ヤコブを焼かれた。

ここにあるように、主はシオンを、「ご自分の足台」と言われています。ご自分がそこに立つとお決めになっていたところを破壊されました。そしてまず、要塞を打ち砕かれます。エルサレムがバビロンに包囲されて、自分たちも要塞を築いていたのですが、それが切り崩されます。それから、

角というのは力を表していますが、それを引き落とされたということです。そして、バビロンがエルサレムを焼きましたが、それを主ご自身が焼いたと言われています。

2:4 主は敵のように、弓を張り、右の手でしっかり構え、仇のように、いとし者たちのすべてを虐殺し、シオンの娘の天幕に火のように憤りを注がれた。2:5 主は、敵のようになって、イスラエルを滅ぼし、そのすべての宮殿を滅ぼし、その要塞を荒れすたらせて、ユダの娘の中にうめきと嘆きをふやされた。2:6 主は、畑の仮小屋のように、ご自分の幕屋を投げ捨てて、例祭の場所を荒れすたさせた。主はシオンでの例祭と安息日とを忘れさせ、激しい憤りで、王と祭司を退けられた。

「敵のように」と二回、繰り返されています。敵のように、であり、敵ではありません。しかし、彼らに罪があるゆえに、罪と聖いものは相容れないのですから、敵のように懲らしめなければ、いけません。そして、例祭、すなわち主への祭りに対しても同じことをなさいます。それがたとえ礼拝として、主を敬っている形であったとしても、罪に対する神の怒りは取り除かれないのです。私たちにあって大事なものは、人が形式的にも礼拝やクリスチャンの活動に集うことを目標とするのか？それとも、正義の中で生きることを目標とするのか？この違いは大きいですね。

2C 城壁 7-10

2:7 主は、その祭壇を拒み、聖所を汚し、その宮殿の城壁を敵の手に渡された。すると、例祭の日のように、彼らは、主の宮でほえたけた。2:8 主は、シオンの娘の城壁を荒れすたらせようと決め、測りなわでこれを測り、これを滅ぼして手を引かれなかった。壘と城壁は悲しみ嘆き、これらは共にくずれ落ちた。2:9 その城門も地にめり込み、主はそのかんぬきを打ちこわし、打ち砕いた。その王も首長たちも異邦人の中にあり、もう律法はない。預言者にも、主からの幻がない。2:10 シオンの娘の長老たちは、地にすわって黙りこみ、頭にはちりをまき散らし、身には荒布をまとった。エルサレムのおとめたちは、その頭を地に垂れた。

要塞が崩れて、そして今は、城壁の中に入ってきて、宮殿、神殿をも壊し、聖所の中にまで入ってきている様子を描いています。その物理的な城壁を壊しただけでなく、彼らにとって支えであった、政治的、霊的指導者のどちらをも潰してしまわれました。王たち、首長たち、そして長老たちも、バビロンに連れて行かれます。そして、預言者たちは幻がありません。幻がない民ということほど、辛いことはありません。「アモス 8:11 見よ。その日が来る。…神である主の御告げ。…その日、わたしは、この地にききんを送る。パンのききんではない。水に渴くでもない。実に、主のことばを聞くことのききんである。」主の言葉、主の知識、主によって見えてくる幻がない世界ほど、私たちが空しくさせるものはありません。しかし、罪を犯し続けたユダはそれを経験しました。

2B エルサレムの傷 11-22

そしてエレミヤは、このような傷の中でも、最も耐えがたい痛みを言い表します。それは、「幼子が殺されていく」ということです。

1C 衰え果てる幼子と乳飲み子 11-16

2:11 私の目は涙でつぶれ、私のはらわたは煮え返り、私の肝は、私の民の娘の傷を見て、地に注ぎ出された。幼子や乳飲み子が都の広場で衰え果てている。2:12 彼らは母親に、穀物とぶどう酒はどこにあるのか、と言いつけ、町の広場で傷つけられて衰え果てた者のように、母のふところでも息も絶えようとしている。

思うに、主が怒りをやめないと決められたのは、マナセ王が子どもを火の中を通らせる、幼児犠牲をするようにさせ、それでエルサレムを幼子の流血で満たしたことによるものでした。これによって主は、もはや赦しはしない、エルサレムを破壊するとお決めになっていました。そして主は、今、同じ子供たちが死に絶えるようにさせているということなのです。子どもをいけにえに捧げていた彼らでさえ、自分たちのしていたことがどんなことかをここで知ることになります。

2:13 エルサレムの娘よ。私はあなたを何にたとえ、あなたを何になぞらえよう。おとめ、シオンの娘よ。私は何にあなたを比べて、あなたを慰めることができよう。あなたの傷は海のように大きい。だれがあなたをいやすことができよう。2:14 あなたの預言者たちは、あなたのために、むなしい、ごまかしばかりを預言して、あなたの捕われ人を返すために、あなたの咎をあばこうともせず、あなたのために、むなしい、人を惑わすことばを預言した。

預言者への糾弾です。預言者が、その場限りの耳障りのよい言葉を語ることが、いかに罪深いことかを糾弾しておられます。罪を犯している者に対して、気が狂う程の預言をエレミヤはしていました。そして、人々は彼に齒向かうのですが、偽預言者たちはその民の思いを組み取って、罪を見つめなくても、バビロンから救われるという惑わしの預言を行なったのです。

2:15 道行く人はみな、あなたに向かって手を打ち鳴らし、エルサレムの娘をあざけて頭を振り、「これが、美のきわみと言われた町、全地の喜びの町であったのか。」と言う。2:16 あなたの敵はみな、あなたに向かって大きく口を開いて、あざけり、齒ぎしりして言う。「われわれはこれを滅ぼした。ああ、これこそ、われわれの待ち望んでいた日。われわれはこれに巡り会い、じかに見た。」と。

エルサレムは絶えず、異邦人による衆人環視の目が光っていました。それだけ高尚なことを話しているのに、イスラエルの神が唯一であり、この方が偉大なのだということを宣言しているのに、もしそれになかないことをしているのであれば、それは大きな嘲りとなります。ですから、キリスト者は他の人々が見ているところで、どのように見られているのか、果たしてその主張していることになかったことを行なっているのかどうか、いつも厳しく問われていますね。テモテへの手紙第一は、まさにそのことに取り組んでいます。監督や執事については、非難のないことという厳しい基準が設けられています。

2C 主に注ぎだす心 17-22

2:17 主は企てたことを行ない、昔から告げておいたみことばを成し遂げられた。滅ぼして、容赦せず、あなたのことで敵を喜ばせ、あなたの仇の角を高く上げられた。2:18 彼らは主に向かって心の底から叫んだ。シオンの娘の城壁よ。昼も夜も、川のように涙を流せ。ぼんやりしてはならない。目を閉じてはならない。2:19 夜の間、夜の見張りが立つところから、立って大声で叫び、あなたの心を水のように、主の前に注ぎ出せ。主に向かって手を差し上げ、あなたの幼子たちのために祈れ。彼らは、あらゆる街頭で、飢えのために弱り果てている。

主は何度も何度も、預言者によってエルサレムに対する警告を語っておられました。それでも、彼らは言うことを聞きませんでした。主がこれらのことを望んでおられたのではなく、むしろ最も望んでおられなかった。だから何度も、語られたのです。ところが、彼らはその道を選んでしまいました。そして 18 節から、「主に向かって心の底から叫んだ」ということを書いています。主に対して心を注ぎなさいということ促しています。このことをこれまでしてこなかったでしょう。しかし、今、心を開いて、主に対して祈りなさいと命じておられます。私たちも、一人一人、また教会として、心を開いて、注ぎだす祈りを持つことは必要ですね。

そしてエレミヤがそのように呼びかけているのは、先ほどの悲惨、すなわち幼子たちが弱り果てている姿を見ているからです。ここで思い出すのが、杉原千畝さんのことです。ナチスを逃れてリトアニアの領事館に、ユダヤ人難民が押し寄せました。日本の通過ビザを発行してほしいということでした。けれども、十分な旅費を持っている者だけにせよという返答が外務省から戻ってきました。けれども、杉原幸子夫人が、難民の内にいた憔悴する子供の姿に目を留めた時に、ここの御言葉が突然心に浮かんだそうです。「主に向かって手を差し上げ、あなたの幼子たちのために祈れ。彼らは、あらゆる街頭で、飢えのために弱り果てている。」そしてちょうどその時に、夫、千畝さんから「ビザを発給することにする。いいだろう？」との問いかけを受けたそうです。

2:20 「主よ。ご覧ください。顧みてください。あなたはだれにこのようなうちをされたでしょうか。女が、自分の産んだ子、養い育てた幼子を食べてよいのでしょうか。主の聖所で、祭司や預言者が虐殺されてよいのでしょうか。2:21 幼い者も年寄りも道ばたで地に横たわり、私の若い女たちも若い男たちも剣に倒れました。あなたは御怒りの日に虐殺し、彼らを容赦なくほふりました。2:22 あなたは、例祭の日のように、私の恐れる者たちを、四方から呼び集めました。主の御怒りの日に、のがれた者も生き残った者もいませんでした。私が養い育てた者を、私の敵は絶ち滅ぼしてしまいました。」

主への訴え、心注ぎがここに書いてあります。実に、幼子は死に絶えていったのみならず、母親が食べてしまったという惨状があったからです。これは耐えがたい、目を背けたいことですが、モーセがイスラエルの民が神に背いたら、そのようなことをすると預言していました。そして聖所で、祭司や預言者が虐殺されています。他のところでならまだしも、聖所で殺されるというのはあまり

にも凄惨です。今も世界各地で、キリスト教会がその教会堂の中で殺されるテロ事件が起きていますし、ユダヤ人もそのシナゴグで殺され、流血が起こります。

そして、主が虐殺したとエレミヤは叫びます。幼子もお年寄りも含めて無差別です。「ほふりました」という言葉を使っています。それは、彼らが虐殺されることには、主の強い御心があるからに他なりません。そして、例祭の時という言葉も使っています。東西南北からユダヤ人が例祭を守るためにエルサレムに上がりますが、まるでそのように敵が四方八方からやって来た恐ろしさを言い表しています。本来、礼拝するところであるのに、こんな凄惨なところになってしまったという衝撃です。しかも、主の御心がここに置かれているということに対する衝撃です。そしてエルサレムでは、この町で多くの人々が養い育てられてきました。霊的にも、また人口においても、育てられてきました。それを敵が滅び尽くします。

そして心からエレミヤは叫び、3章において自分の惨めな思いを吐露するところに入ります。これは次回読みますが、私たちに 1-2 章で教えてくれることは、「罪には嘆きが必要だ」ということでしょう。罪がもたらす嘆きがこれだけのものなのだ、ということでしょう。だから、十字架なのだということも知りました。神の怒りというものがどういうものかを知りましたが、イエス様がそれをご自身で受けられることによって、無知な私たちがこれらの神の怒りから免れることができるよう、十字架で執り成しの祈りを捧げてくださったのです。

罪に対して、私たちは、どこにも持っていくことのできないやるせなさを感じます。慰めがないと何度も何度も訴える、その祈りがあります。それは自分自身の罪もあるでしょうし、教会の中における罪もあるでしょうし、そして不信者の人が福音を拒むなど、彼らの罪もあるでしょう。誰にしても、その罪を見る時に、神の怒りがあることを思わずにはいられないのです。それで、私たちの心は悶え、嘆き、悲しみ、解答のない心の叫びを抱くのです。しかしそれでも、心を主に注ぎだしました。これが大切です。解答はないけれども、心を注ぎだすのです。すると、パウロが肉体の棘について祈ったように、またエレミヤも 3 章で気づくように、そこにあるキリストの恵み、神の憐れみに出会います。